

な か ま

発行
佐倉市立中央公民館
編集
なかま編集委員会
〒285-0025
佐倉市鎗木町 198-3
電話 (043) 485-1801

わがまちの石に～ ----- 岡野 哲 戦争はごめんだよ ----- 廣吉 正毅
いざ 世界の富士へ ----- 田辺 照男 『弱者』の気持! ----- 喜多 平明

将棋思いつくま

長谷川 祐作

子供から大人まで楽しめる遊びの一つに将棋がある。いつの頃に覚えたかは定かでない。近所のガキ大将に習ったことから推測すると、未だテレビ放送が家庭に入り込んでいない小学校低学年の時期と想われる。将棋倒し、まわり将棋、はさみ将棋から始めて、いつしか駒の動きを覚え、本将棋を指せるようになった。

の夭逝であつた。
新年そうそう谷川浩司九段の「A級順位戦」からの陥落が決まった。米長邦雄永世棋聖の急逝の後を継ぎ、日本将棋連盟会長の激務の最中での降級だった。速くて正確な終盤の寄せで「光速流」と呼ばれた。史上最年少（21歳）で名人位を獲得し、A級連続在籍32期。

埼玉県北の町で、三男一女の二男として生まれ育った。学年が一つ違いの兄とは、いつも一緒に遊び、冬には肩を寄せ合つて寝た。そういう訳で、ライバルは兄以外には考えられなかった。勉強、運動ともに兄には及ばなかった。将棋も兄に負け続けた。負けては悔し涙を流しながら、何度も勝負をせがんだ。

彼は自著『ちよつと早いけど僕の自叙伝です』の中で「最年少名人と最年長名人。この二つを手にしたら、棋士として、これほどの生涯はないだろう」と言っている。ちなみに、現在までの最年長名人は、米長邦雄の49歳11カ月での獲得、50歳での在位である。

中学生になるとお互いに部活動で忙しくなり、将棋を指すことも殆どなくなった。その後、当時のNHK教育テレビ（現在のNHK Eテレ）の将棋講座を楽しむ程度になつてしまつた。

将棋は頭脳と気力、体力の勝負である。それ故、52歳の彼が再び名人位に返り咲いたなら、多くの人に希望と勇気を与えてくれるだろう。そんな日を心待ちにしている。

先日手にした本に『聖の青春』がある。棋界の俊才「村山聖」の人生を綴つた大崎善生の感動のノンフィクション小説である。ネフロゼ症候群という疾患で少年期を過ごし、偶然出会つた将棋に夢を追い求めた。師の森信雄との生活は、どちらが弟子か師匠か判らない程の信頼と慈愛に満ちていた。そして、難病を抱えながらも、名人位への夢を希求し続けた。

しかし、将棋A級に在籍しながら癌に倒れ、夢かなわず、生まれ故郷の広島の病院で1998年、静かに息をひき取つた。「東の羽生、西の村山」と称せられた怪童の29歳で

(編集委員)

わがまちの石に込められた 人々の思いを知ろう

王子台に住んで約30年、仙台での高校、大学時代から歴史好きだったが、会社員時代は地元には無関心だった。退職後健康目的に市民ハイキングクラブに参加、市内には、古代から近世に至る多くの史跡、神社・寺院があることを知った。

或る日、染井野の七井戸公園の弁天様の傍にある昭和10年建立の溜池改修の碑が目にとまった。風化した文字に、改修に至るまでの千代田村の人々の苦労が読み取れた。その日々以来、石碑・石仏建立の時期、人、理由、背景やその地域の歴史等を知りたくなった。

図書館やネットで調べると地元の石碑・石仏に関し多くの調査研究があると分かった。それと共に、これらの歴史文化について、もっと理解しやすいものがあればと思うよう

になった。

歴史の町・文化の町の佐倉市民が石碑・石仏という身近だが見過ごされがちな歴史遺産を知り、市外の人々にも佐倉市の歴史文化をPRしてもらえればと思いい、8人の仲間と「白井の石碑・石仏」というホームページを開設した。気軽に歩いて触れられる石碑・石仏を簡単なマップで案内、謂れも記載し豆知識の項も設けた。

神社の社殿の陰の疱瘡神を祀った小さな石祠、安産と健やかな子の成長を願う子安観音、命永らえたいとの庚申塔、現世と来世の安楽を刻んだ出羽三山参拝碑などを目にし、医療が整ってない時代に懸命に生きた佐倉の先人を思い起していただければと思う。今後も更に佐倉市内のいろいろな石碑・石仏を紹介し、歴史と文化の町佐倉に微力ながら貢献していきたい。

(王子台 岡野 哲)

戦争はごめんだよ

人間は自惚れたり「いい気」になったりしたらおしまいだ。小さいころから「天狗になったらダメ：」なんぞとしよつちゅう聞かされてきた。だがこれが一国の権力者だとして、大ごとである。

さきの大戦は二つの原爆を落とされて終わった。多くの人が亡くなった。人々は戦争の空しさを知り不戦を誓う。そして戦後の復興を成し遂げて民主国家の日本がここにある。

あの戦争は突発的に起きたものではなかった。そこには日本を取り巻く厳しい外交問題があったと聞いた。また国内では体制の強化がすすめられ言論は統制された。

こうして日本は次第に軍国体制を強め徐々に戦争へと引き込まれていった。いま、ここに至る事情をなぞってみると、なぜか現在がそのかつて

の開戦前の状況と重なり一抹の不安が頭をよぎる。と言うのは、日本は現に周辺国との領土問題を抱えている。その根底には難しい歴史認識のうえでの問題がある。だが解決の道筋はお互い対話でさぐりあてるしかない。日本はここで国際的に孤立してはならない。

民主国家は国民こそが真の主権者であって、国民は国に行く末を知る知恵があるものだ。かつてのあやまちを繰り返さないために国民に情報を公開してもらわなければならない。国民には「知る権利」があるのだ。公開する情報は正確でなければ意味がない。国民の「知る権利」と「言論、表現の自由」は表裏一体であり民主主義の根幹といえる。国家は真摯に「国民の声」を聞くべきだ。

戦争は永久にいらん。
(ユーカリが丘 廣吉 正毅)

いざ 世界の富士へ

2013年8月7日、10時30分、吉田ルート、富士スバルライン五合目(2304^{メートル})から登山開始。晴れ、無風。体を慣らしながら六合目(2390^{メートル})を目ざす。標高差はないが砂礫の道をゆつくり登る。11時20分、六合目で、河口湖や山中湖を遠望しながら昼食。

いよいよ急な登りだ。期待と不安に襲われる。側壁が整備された道幅の広い砂礫のジグザグ道を登る。眼下に広がるパノラマの風景に暫しの休み。膝は順調。少し自信が。12時40分、七合目(2700^{メートル})に到着。何とか高山病は乗り越えたか。

ここから宿泊予定の本八合目(3400^{メートル})までは溶岩の岩肌を登る険しい道が続く。息苦しくなってきた。何度も足を止め深呼吸する。不安がよぎる。にわかには暗雲が風と共に大粒の雨。急傾斜の

岩肌の上で、必死に雨具を着るが、慌ててバランスを崩す。重なる大きな岩、這うように一歩一歩登る。黙々とマイペースで。濡れた手袋が冷たい。

16時10分、山小屋に到着。暖かいカレーを食べてホッとす。安堵感と高揚感で興奮気味。ビールが美味しい。

深夜1時50分、完全防寒装備で、頂上に向かって出発。ご来光を見ようという登山者が数珠つなぎ。後方のジグザグの道がヘッドライトで綺麗に輝く。胸突き八丁の急坂に登り、浅間大社大宮の鳥居をくぐり頂上だ。4時10分。

まだ辺りは真っ暗。体感温度はマイナス。5時、雲の間からご来光が。一齐に「万歳、万歳」の声。感動と至福の時。

66歳4カ月、登山歴なし。仲間6人、リーダーに感謝。3週間後、吉田口一合目から五合目を登山し、完結。

(上志津 田辺 照男)

『弱者』の気持ち!

5年ほど前、私は不覚にも階段から転落して、頸椎損傷の大怪我で病院のベッドに首を固定され仰向けに寝ていた。

麻痺のため、手足が殆ど動かない状態で、ある深夜、あまりに手がシビレて痛むので、ブレス・コール(手が使えない人が口笛を強く吹く様にして、看護師さんを呼ぶ器具)で、ヤツと看護師さんを呼んだ。

しばらくして、来てくれた看護師さんが「遅くなってごめんなさいネ! さぞかし辛かったですよ!」と言って、私の手を優しく、マッサージしてくれた。その間も彼女の胸ポケットのナースコールは、ひっきりなしにピーピー泣く様に助けを求めて鳴っていた。

私は申し訳なくなり、5分間くらいで「私はもう結構ですから、他の患者さんの所に行ってあげて下さい!」と言

った。すると彼女は「そうですか! もっと続けてあげた方がいいですが、これくらいしか出来なくて本当に、ごめんなさいネ!」と申し訳なさそうに言い残して、他の患者さんのもとへ急ぎ去った。

その後、仰向けに寝ているだけの無力な私の辛いシビレや痛みを、たとえ5分間とはいえ、一生懸命に和らげてくれた看護師さんの優しい誠意を思い返した。

更に、これまで自分は、人並み以上の知力と体力を有していると言信していた。傲慢で、生意気で、不遜な『己の愚かさ!』を思うと、深夜の静寂の中でハラハラと涙が止めどなく流れ落ちた。そして、これまで多くの人達に助けられ、支えられて、過ごして来られたことを、自分が『弱者』になって、改めて痛感したのである! しかも感謝をこめて…。

(王子台 喜多 平明)

5月の黒板

『なかま』の原稿を募集しています！

『なかま』の2ページと3ページは佐倉市民の皆さんから投稿いた

だいた記事を掲載しております。

『なかま』の原稿は、自由テーマを原則としています。「出会いと別れ」、「旅の思い出」、「祭り」、「私のふるさと」、「私の健康法」など何でも構いません。また、日常での出来事で発見したこと、気付いたこと、経験や感想などもご随意にお書きください。

原稿の字数は、650字（13字×50行）以内です。また、掲載するにあたり常用漢字への変更、句読点等の修正や語句の訂正をさせていただきます。

問い合わせ先

佐倉市立中央公民館 TEL 043-485-1801

〒285-0025 佐倉市鍋木町198-3

URL http://www.city.sakura.lg.jp/soshiki/16-1-0-0-0_1.html

さくら道

「…ながらラジオ」とはよく言ったもので、改めてその便利さを見直したい。

わが国最初の放送は1924年12月、東京電機大学が行った実験放送で、その4カ月後にNHKが。そして、1951年9月に中部日本放送が本格的に開始したのが民放の始まりだそう。

今ではテレビやインターネット等に居場所を奪われ影は薄く、ある調査では20・30代

の4割の人が「ラジオは聞かない」という結果で、肩身の狭い思いをしているらしい。だが、ラジオは電源を入れっ放しで良く、「何かをしなから」でも、目を瞑ったままでも放送内容を理解出来、またアナウンサーの顔を勝手に想像してみる面白さもある。災害時や理・美容中、電車の中など活用場面はまだまだありそう。

(田中 修司)

あとがき

風薫る5月。過ごしやす季節となりました。

岡野様の、歴史の町佐倉を知る為の切り口にも、いろいろな方法のある事が判りました。新しい発見楽しみます。

「戦争はごめんだよ」は全く同感です。戦後の民主主義の時代を経験し、学んだ自信をもって、国の方向を確り見つけていきたいと思えます。富士山は、世界遺産に登録

されてから登りたいと思いましたが、家族に止められて断念。私の体力では正解でした。「弱者の気持」は感動して幾度も読み返しました。看護師さんへの感謝と自己への厳しい姿勢から、喜多様は心の優しい強い方だと思いました。今号で最後の仕事となりました。いつも貴重な投稿文を拝読し、勉強させて頂きました。これからも沢山の投稿、お寄せください。

(大蔵 康次)